

富山大学人文学部令和5年度卒業論文

子育て支援における家庭訪問型支援の意義：ホームスタート・はくさんを事例に

富山大学人文学部人文学科  
社会文化コース社会学分野  
学籍番号 12010103  
氏名 多長希美

## 目次

第1章	問題関心	1
第2章	先行研究のレビュー	2
第3章	調査概要	4
第1節	オーガナイザー川上さんへのインタビュー	4
第2節	現役ホームビジター2名へのインタビュー	5
第3節	ホームビジター養成講座への参加と参加者へのアンケート	7
第4章	ホームスタート・はくさんの活動実態	8
第1節	施設概要	8
第2節	ホームスタート・はくさんの運営体制と活動実績	10
第3節	ホームスタート導入までの過程	13
第1項	ホームスタート導入のきっかけ	13
第2項	ホームスタート・ジャパンによる協力	13
第4節	「ホームスタート」について	14
第1項	ホームスタートの「オーガナイザー」「ホームビジター」「利用者」	15
第2項	ホームスタートの申し込みから活動の流れ	15
第3項	利用者とホームビジターのマッチング	16
第5節	ホームビジターの存在	18
第1項	ホームビジターの養成	18
第2項	オーガナイザーが望むホームビジターの姿	20
第3項	現役ホームビジターの活動中における利用者との距離感	22
第4項	活動中のホームビジター本人のやりがい	22
第5項	オーガナイザーとの関係性	22
第6節	ホームスタートと行政との連携	24
第7節	ホームスタートと他事業	25
第1項	ひろば型との関わり	25
第2項	産後ヘルパーとの関わり	25
第3項	ホームスタート終了後の関わり	26
第8節	子育ての孤立感とホームビジターの傾聴	27
第9節	ホームスタートの課題	28
第5章	考察	30
第1節	傾聴と協働	30
第1項	傾聴	30
第2項	協働	31
第2節	無償ボランティアである理由	32

第3節 訪問型支援であることの意義	33
第4節 隙間を埋める支援	35
第5節 ホームスタート・はくさんから始まる子育て支援	37
参考文献・参考資料 URL	39
巻末資料	40

#### 図表一覧

表4-1 ホームスタート・はくさんにおける利用家庭数・子ども数・訪問回数実績
表4-2 ニーズ14項目と利用者のニーズ割合、訪問活動終了後の利用者充足度
表4-3 ホームビジター養成講座開講日〈全8回〉

## 第1章 問題関心

少子化が進む日本では、歯止めをかけるため様々な対策が議論され実施されてきた。近年は核家族化が進む影響で「子育ての孤立」がより進んでおり、「孤育て」「ワンオペ育児」という言葉にも注目が集まっている。そこで政府は「子育ての社会化」を提言し子育てが家族の責任だけで行われるのではなく、社会全体で行う子育てを目指そうとしている。2015年に導入された「子ども・子育て支援新制度」においても大きな目標として地域の子育て支援の充実が掲げられている。これらのおかげで利用者支援、地域子育て支援施設は増加したが、積極的に施設へ足を運ぶ親もいれば何らかの理由で行くことができない親も存在しており、助けを必要としているすべての子育て家庭に「子育ての社会化」が実現する支援を提供できているとはいえない。さらに、子育てサークルに参加しても中にはコミュニケーションをうまくとれない人もいる。

そこで子育て支援施設へ行くこと、子育てサークルへ行くことが難しい家庭への支援として期待される一つの取り組み「家庭訪問型子育て支援」に焦点を当てる。その中でもイギリスで始まった訪問型子育て支援ボランティア「ホームスタート」に注目する。ホームスタート・ジャパン(2011)によると、ホームスタートとは乳幼児が一人でもいる家庭にホームビジターと呼ばれる地域住民のボランティアが週一回2時間程度訪問し、共感的な「傾聴」(気持ちを受け止めながら話を聞くこと)や「協働」(育児家事や外出を一緒にする)等を行う。具体的な活動例は、一緒に子どもと遊ぶ、一緒に離乳食やお菓子を作る、子育てや生活情報をおしゃべりしながら聞く、気持ちのモヤモヤを聴いてもらう、子どもと一緒に公園へ散歩する、一緒に子育てひろばや子育て支援センターに行ってみる、一緒に病院やお買い物に行く等、個人のニーズに合わせ幅広い。詳しいホームスタートの説明は第4章で行う。

ホームスタートはこれまでの子育て支援とは形態が異なるアウトリーチ型の支援であるが、どうして需要が高まっているのだろうか。本論文ではホームスタートの運営団体に関わる人たちへ調査を行い、訪問型子育て支援の意義について検討する。

## 第2章 先行研究のレビュー

ホームスタートは日本で2009年から本格的に始まった支援であり、年々全国に拡大している。しかし、未だホームスタート研究に関する論文はそれほど充実しておらず徐々に増えつつある現状である。

その中でも加藤、請川(2019)は地域子育て支援において「子育て支援施設の潜在的利用者(どの支援の場にも参加しない母親)」を真の支援対象とし、子育て支援施設に行くができない母親や行政の支援対象に含まれないものの何らかの手助けを必要とする家庭への援助としてイギリスで始まった訪問型子育て支援「ホームスタート」に着目した。加藤らは実際に調査を行い「ホームスタート」の「隙間を埋める支援」における有効性を検討している。ここでの「隙間」とは行政の支援対象となる家庭と特に支援を必要としない家庭の間を指し、間に位置する家庭が何らかの問題を抱え機能不全に陥っているところへの支援を「隙間を埋める支援」としている。

調査対象は「支援センターM」が運営するホームスタートを実施している地域組織に登録しているホームビジター(ボランティア)とオーガナイザー(運営スタッフ)の2名で、インタビュー調査を行った。さらに、事前調査としてホームビジター15名のうち8名から質問紙調査の回答を得た。

この調査から、ホームスタート利用者は生活困窮者ではなく真面目で几帳面な印象を受ける母親が多いことが分かった。どこにでもいる一般的な家庭も育児不安によるストレスによって助けを必要としており、このような行政の支援の対象にはならない家庭に対してもホームスタートは利用可能である。実際の活動については自身の経験から子育ての難しさを理解しているホームビジターが友達のように寄り添い、世間話の延長のような形で育児の相談ができる機会があることは母親にとって大きな援助になると述べた。さらに、「支援センターM」の活動実践では、ホームスタートを利用している26名のうち10名が支援の場に足を運ぶようになったという結果を得ることができた。また、5名の母親が保育所に子どもを預け、就労している。以上の結果から、ホームスタートは孤立した母子を支援の場に引き出す、子育て支援施設の潜在的利用者を能動的に掘り起こすために効果的であると結論づけている。

加えて、ホームスタートを継続的、安定的に行うためには行政と共に活動を推進していく組織や仕組みの構築が必要であるとも述べている。具体的には保健師や助産師の訪問支援の際にアクセス方法を知らせたり、ホームスタート事業を行う運営団体から情報発信する等、官民の垣根を超えた広報活動が必要だと述べた。

この研究成果を受けて、ホームスタートは「隙間を埋める支援」として機能している可能性が考えられるが、ホームスタートは運営団体によって異なる特徴を持つように考えられる。本論文で調査対象とするホームスタート・はくさんの持つ支援の特徴と先行研究で課題として述べられた支援継続のための柱とされる行政との連携について注目する。さらに従

来の子育て支援は利用が困難だった潜在的利用者がなぜホームスタートへの申し込みは可能になるのだろうか。家庭訪問型支援が従来の支援と異なる点についても調査し分析する。

### 第3章 調査概要

本研究では、ホームスタート・はくさんの運営を行う認定 NPO 法人おやこの広場あさがお（以下あさがお）を拠点に関わりのある人たちへインタビューとフィールドワーク、アンケート調査を行った。詳しいホームスタート・はくさんの運営体制と運営を行うあさがおの概要については第4章でまとめる。

#### 第1節 オーガナイザー川上さんへのインタビュー

あさがおで理事・施設長・子育て支援コーディネーターとして活動し、さらにホームスタート・はくさんの運営を行うオーガナイザー、川上由枝（かわかみよしえ）さんにインタビュー調査を2回行った。実施日時と主な質問項目は以下の通りである。

##### ・インタビュー①

実施日時：2022年12月12日（月）14：00～16：30

場所：おやこの広場あさがお

##### ・インタビュー②

実施日時：2023年5月1日（月）10：00～11：30

場所：おやこの広場あさがお

#### <主な質問項目>

- ・組織と設立経緯
- ・事業・活動について
- ・会員制度について
- ・ホームスタートの導入・開始について
- ・ホームスタートの活動実績について
- ・ホームスタートのオーガナイザーについて
- ・ホームスタートの利用/利用者について
- ・ホームビジターについて
- ・ホームスタートの効果と今後の展望について

## 第2節 現役ホームビジター2名へのインタビュー

ホームスタート・はくさんでホームビジターとして活動する2名とオーガナイザーの川上さんを交えインタビューを行った。実施日時とインタビューの基本情報は以下の通りである。

実施日時：2023年8月9日（水）13：00～14：30

場所：おやこの広場あさがお

Aさん

- ・女性
- ・2019年活動開始
- ・お子さん2名（22歳、17歳）
- ・パソコン関係のアルバイトを週3回
- ・10件目を担当中

Bさん

- ・女性
- ・2015年活動開始
- ・お子さん3名（33歳、31歳、29歳）
- ・保育士、幼稚園教諭資格保有
- ・発達相談支援の仕事を不定期
- ・10件目を担当中（家庭の事情で一時お休みしていた）

<ホームビジターを始めたきっかけ>

Aさんは同僚がホームビジターの講座を受けることを聞いて自分も講座への参加を決めたという。ホームビジターを始めたきっかけとして、自身の子育ての時に困難な経験をしたことが挙げられた。Aさんはファミリー・サポート・センターを利用しようと電話したが上手く取り次いでもらえず利用が叶わなかった。このような経験から子育てで不安な気持ちを持っている人に何かしたいという思いを持っており、資格がなくても子育ての手伝いができるならとホームビジターを始めたそう。

Bさんは、元々オーガナイザーの川上さんと知り合いで、声を掛けられたことがきっかけで1期生としてホームビジターを始めた。研修を受けていく中で、娘さんが富山に移り住んで子育てを始めた際に相当な苦労をしていたことと重なり、ホームスタートの活動に賛同する気持ちが強くなっていったことが語られた。

<主な質問項目>

- ・ホームビジターを始めた年
- ・お仕事について
- ・お子さんについて
- ・ご自身の子育てについて
- ・ホームビジターを始めたきっかけ
- ・ホームビジター養成講座について
- ・ホームスタートの具体的な活動について
- ・利用者との距離感
- ・オーガナイザーとの関係性について

### 第3節 ホームビジター養成講座への参加と参加者へのアンケート

ホームスタートの活動に必要なボランティアであるホームビジターになるには37時間程度の研修が必要である。研修は週1回のペースで計8回行われ、一回は9時半から15時半までの一日。この期間を経ることでオーガナイザーはホームビジターの大体の特徴を掴むことができ、利用者とホームビジターのマッチングに役立つ。さらに、内容としてはワークショップのような研修が半分以上を占めるため、ホームビジター同士の仲間意識も強まっていく。講座はお茶とお菓子を添えて穏やかな雰囲気で行われることで、自然体でいられることや仲間意識の向上にも繋がりやすくなっているようだ。また、研修後活動頻度は人によってまばらであるため、ホームビジターのモチベーション維持のフォローアップ研修を行っている。

今回、ホームスタート・はくさんが主催するホームビジター養成講座全8回のうち5回に参加した。今年度の講座はホームビジター6期生の育成で、13名の申し込みがあった。さらに、ホームビジター養成講座の最終日、参加者13名にGoogleフォームを用いたアンケート調査を行い、12名から回答を得た。アンケートの最後には任意で連絡先記入欄を設け、了承を得た6名へ電話とメールを利用して追加インタビューを行った。追加インタビューでは主に講座へ申し込んだきっかけを深掘りした。

日時：9月/10月の毎週木曜日（2日目を除く）

9：30～15：30

場所：白山市福祉ふれあいセンター

<主なアンケート項目> （詳細は巻末資料参照）

- ・基本情報（年齢・職業・資格・子どもの人数と年齢）
- ・ボランティア活動の有無
- ・ホームスタートを知ったきっかけ
- ・ホームビジター養成講座に参加するきっかけ
- ・講座への期待と不安
- ・講座で特に印象に残っている回とその理由
- ・受講前後でのホームスタートとホームビジターに対する印象の変化
- ・受講前後での自分の考え方や日常生活の変化
- ・ホームビジターの活動に対する気持ちの変化
- ・オーガナイザーと他の参加者との関係性
- ・講座に対する満足度
- ・ホームスタートの周知についての関心度

## 第4章 ホームスタート・はくさんの活動実態

### 第1節 施設概要

団体名：認定NPO法人おやこの広場あさがお

開設年：2002年

拠点：石川県白山市

職員数：9名

設立経緯：「敬愛愛子様ご誕生記念親子よろこびの広場事業」を（財）いしかわ子育て支援財団が請け、当初石川県の中で、広場事業の先駆けのモデル事業としてスタートする。

- 事業内容：
- ・地域子育て支援拠点（つどいの広場事業から2007年に再編）
  - ・利用者支援事業：＜子育て世代包括支援センター基本型＞
  - ・家庭訪問型子育て支援（ホームスタート・はくさんを運営）
  - ・一時預かり事業
  - ・産前産後安心ヘルパー派遣事業
  - ・プレママプレパパ講座（両親学級）
  - ・研修会/講座
  - ・BPプログラム・NPプログラム（親支援プログラム）
  - ・パパネット（父親のネットワークづくり）
  - ・世代間交流：次世代育成（学生）
  - ・出前広場
  - ・子育て関連の情報提供
  - ・多胎ファミリー支援
  - ・サークル支援

山口（2011）は、地域子育て支援拠点の中でもひろば型に注目し、三カ所の実施団体に調査を行い、あさがおも調査対象に含まれている。また、地域子育て支援拠点やひろば型についても詳しくまとめられているため、この論文を用いて説明する。

ひろば型においては常設のつどいの広場を設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取り組みを実施している。従事者は子育て支援に関して意欲があり、子育てに関する知識・経験を有する者が2名以上、実施場所は公共の空きスペース、商店街空き店舗、民家、マンション、アパートの一室等、開設日数等は週3回以上、1日5時間とされている。

地域子育て支援拠点事業の基本事業は以下の4つ。

#### ① 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進

- ② 子育て等に関する相談、援助の実施
- ③ 地域の子育て関連情報の提供
- ④ 子育て及び子育て支援に関する講習等の実施

ひろば型ではこの 4 つの基本事業に加え、いくつかの取り組み内容が与えられている。その一つが、地域のニーズや実情を踏まえ、近隣の公共施設等を活用して、ひろば型と同様の事業を実施する出張ひろばの開設に努めることである。出張ひろばによって、常設のひろばを開設することが困難な場所でもひろば型と同じ活動を行うことで、支援を拡充しようとしている。あさがおでは、新興住宅地や子どもの少ない地域に出向き、出前広場を定期的に行っている。

## 第2節 ホームスタート・はくさんの運営体制と活動実績

ホームスタート・はくさんは石川県白山市に所在する認定NPO法人おやこの広場あさがおを拠点に運営されている。運営体制は以下の通りである。

事業開始年：2015年

オーガナイザー：3名（2022年12月時点）

ホームビジター：46名（2022年12月時点）

トラスティー（運営委員）：市子ども子育て課、保健師、助産師会、小児科医、市主任児童委員、大学幼児教育学科准教授

連携先：子育て世代包括支援センター、子ども子育て課・保育園・児童館、民政児童委員・産院・小児科・NPO法人いしかわ多胎ネット等

ホームスタート・はくさんが事業をスタートさせた2015年から2020年新型コロナウイルス流行前までの5年間の活動実績は以下の表の通りで約150家庭に1300回程度訪問を行っている。流行後はやはりホームスタートの利用は減少したとのことだった。訪問は家庭の中に入っていくため、利用者から延期にして欲しいという声もあったという。また、ホームビジターは50～60代の方が多かったため、ホームビジターの実際の活動人数も減少していた。一方でホームスタートはひろばのような人が多く集まる場に行くよりも来てもらった方がリスクは少ないと思える親子にとっては需要があった。その間、訪問時間は正規の2時間より短めで、換気・手洗いを徹底して行っていた。現在は元の利用数に戻りつつあるようだ。

表4-1 ホームスタート・はくさんにおける利用家庭数・子ども数・訪問回数実績

	2015/4/1～ 2020/1/31	乳幼児（生後直後 から小学校入学前 の未就学児）	産前
利用家庭数	147	138	9
子ども数	263	254	9
訪問回数	1259	1209	50

表中の乳幼児とは生後直後から小学校入学前の未就学児を指す。産前とは妊娠期の方の家庭へ訪問することである。ホームスタートの事業として基本的に乳幼児が対象であり、年数を重ねて対象が拡大されたことによって妊娠期の家庭への訪問が可能になったため訪問回数は乳幼児と比べて少ない。

利用家庭については、ホームスタートは普通に子育てをしている人も利用が可能で特に

制限はない。実際にはこれに加えて多胎児を持つ家庭や引っ越してきたばかりの家庭からの申し込みは多いようだ。また、夫が単身赴任中の家庭や母子家庭の申し込みは多い一方で父子家庭の利用はない。ただし、母親が体調を崩して長期入院している家庭からの申し込みはあったという。父親中心に子育てをすることになったことが理由でホームスタートを利用したいという事例だった。

ホームスタートでは全国共通で初回訪問時に利用者のニーズを14項目に分類した共通のチェックシートを使って申込者の利用目的の確認を行う。以下がその14項目とホームスタート・はくさん利用者のニーズ割合、訪問活動終了後の利用者の充足度である（2019年4月1日～2020年1月31日集計）。ニーズ割合は初回訪問時に利用者が複数選択したニーズ項目をそれぞれ合計のニーズ数で割って算出する。充足度は訪問活動終了時に初回に選択したニーズ項目が充足及び一部充足したかを選択してもらい、割合として算出している。

表4-2 ニーズ14項目と利用者のニーズ割合、訪問活動終了後の利用者充足度

	ニーズ項目	ニーズ割合(%)	充足度(%)
1	孤立感の解消	71	100
2	子育てサービスの利用方法を知る	39	100
3	親自身の心の安定	61	94
4	自尊感情や自己肯定感	21	100
5	親の身体の健康	25	100
6	子どもの身体の健康	11	100
7	子どもの心の健康	36	100
8	子どもの問題行動の減少	25	86
9	子どもの成長・発達を促す機会を作る	61	100
10	家族間のイライラの減少	21	83
11	家事の上達	61	100
12	家計の悩みの軽減	0	0
13	多子の悩みの軽減	14	100
14	その他	4	100

上のデータから分かる通り「孤立感の解消」の項目が最もニーズが多く、多くの申込者が孤立感の解消を期待していることが分かる。そして、終了後の利用者の充足度は100%でニーズを満たしている。終了後のアンケートは利用者自身に自由に記述してもらう形式を採用している。利用者自身に活動を振り返ってもらうことで、活動を通しての変化を客

観的に捉えられるようになることを重視している。どの項目も充足度が高いことに関して、川上さんは最初にニーズを明確にするからだと言語。ニーズを明確にして活動内容を決め、変化を起こしていくため本人の充足度が高まっている。

### 第3節 ホームスタート導入までの過程

#### 第1項 ホームスタート導入のきっかけ

川上さんはひろば型事業を続けていく中で、ひろばを訪れてくれる人たちに対しては情報共有や話や悩みを聞くといった支援ができるが「ひろばに出て来ない、出て来られない親子」に対しては為す術がないことを気がかりに思っていた。そこで、出てきてもらうのではなく自らが出て行くアウトリーチ型の支援に注目したことが語られた。追加インタビューでは、ホームスタート導入前から自分たちの責任の中で訪問を行うこともあったという語りもあった。拠点の利用者である母親から泣きながら電話がかかってくる様子を見に行くために訪問したり、母親が熱を出した際にご飯を持っていったりすることもあったという。導入前から訪問については需要があると分かっていたが、事業化するには様々な下準備に加えお金の確保も必要となる。さらに地域の人に受け入れられる必要もあったため拠点を訪れる保護者にホームスタートをどう思うか尋ね、意見を取り入れていた。ある程度理解が得られている感触を持ってから本格的に動き始めたそうだ。

#### 第2項 ホームスタート・ジャパンによる協力

ホームスタート・ジャパンとは日本でのホームスタートの普及と支援の質の向上活動に取り組んでいる団体である。ホームスタートを導入する際のホームスタート・ジャパンのサポート体制について川上さんに質問をしたところ「丁寧に伴走してくれるやり方」という回答が得られた。例えば立ち上げに関するお金の目処はあるか、運営・調整を行うオーガナイザーの役割をできる人がいるか、事業の時間配分はどうかなど、細かい事に関してホームスタート・ジャパン側が気に掛けてくれているそうだ。さらに、団体といっても堅苦しいものではなく、個人の携帯電話からでも随時相談に対応してもらえる点を評価しており、川上さんにとって相談しやすく頼れる存在となっていると思われる。ホームスタート・ジャパンはあくまでもサポートという立ち位置を貫いており、ホームスタートを導入したいという意思のある団体に対して、一緒に基盤作りを行っていくという意識が高いように考えられる。

また、川上さんのインタビューでの語りから川上さんはホームスタート・ジャパンのネットワークについても評価していることが分かった。ホームスタート・ジャパンは全国でホームスタートを運営する団体と繋がりがあるため、これを活用すれば他団体の活動の様子を知ることができる。さらにホームスタート・ジャパンは国の動向をいち早く取り入れてネットワークを利用して地方へ伝達し、地方の意見を聞いてくれる。ホームスタート・はくさんがある石川県を含む北陸三県（石川県、富山県、福井県）では現在ホームスタートを導入している団体は二つのみである。そのため川上さんはこのネットワークによって支えてくれている人がいる安心感を得ること、情報の充実を可能にしている。このようなネットワークが現在全国で拡大するホームスタートを行う団体を精神的に支えているのだろう。

#### 第4節 「ホームスタート」について

ホームスタートは、最初にどんなことに困っているのか、どんなふうにホームビジターと一緒に過ごしたいのか、オーガナイザーが利用者と共に考え一人一人のニーズに合った支援になるよう調整を行う。イギリスで約50年前に始まったこの独自の訪問支援のしくみは世界22カ国に広がっている。また、3年に一度「ホームスタート・ワールドワイド(HSW)」という国際ネットワーク組織がグローバル・カンファレンスを開催し、多様な家庭への支援に関する経験値の共有が図られている。2006年に任意団体として設立された「ホームスタート・ジャパン」はHSWの認証を得た国内で唯一の団体として国際ネットワークに所属し、日本でのホームスタートの普及と支援の質の向上活動に取り組み続けている。この成果もあり、日本では2009年に本格的に始動してから年々全国に実施施設は拡大している。32都道府県の約120地域で活動し、1万4千家庭にのべ10万回の訪問実績がある。

ホームスタートの3つの理念と8つの支援原則は以下の通りである。

##### <3つの理念>

- ①子どもの最善の利益
- ②子育て家庭の孤立防止
- ③親（保護者）のエンパワメント

##### <8つの支援原則>

- ①気持ちにより添う  
実践的な傾聴や協働などのサポートを提供する
- ②フレンドリー  
善悪を押しつけず、親を批判せず思いやりがあるフレンドリーな態度
- ③尊厳性（尊敬）  
保護者をかけがえのない存在として尊重し、尊敬をもって対応する
- ④無差別・機会平等  
すべての子どもたちの成長の機会の平等性を重視する
- ⑤信頼関係  
親を信頼し信頼関係に基づいた支援を行う
- ⑥地域資源につなぐ  
地域社会において家族が関われるネットワークを広げる後押しをする
- ⑦子育て当事者性  
ホームビジターとオーガナイザーは原則として自分自身が親であるか、子育て経験があることを前提とする

## ⑧無償ボランティア

お金を関与させないフラットな関係での支援は傾聴の効果を上げ支援対象の幅を広げる

### 第1項 ホームスタートの「オーガナイザー」「ホームビジター」「利用者」

ホームスタートには「オーガナイザー」「ホームビジター」「利用者」の三者が登場し活動が成立する。

「オーガナイザー」とはホームスタートの運営スタッフのこと。主な役割は①訪問活動のケースマネジメント②ホームビジターのリクルートと養成③地域の各種支援機関との連携の3つで、利用者とボランティアの両者をサポートしている。

「ホームビジター」はホームスタートの活動で家庭への訪問を行う無償ボランティアの名称。ホームビジターは各地域の運営団体が開催する約40時間程度8日間の養成講座を修了した上で活動する。この養成講座は全国共通のシラバス（傾聴スキル、訪問実務の理解、守秘義務等の活動指針、子どもの権利や保護他）に基づいて提供されている。参加条件は子育て経験者であること、全日程参加できること、修了後活動の意思があることである。ただし、ホームスタート・はくさんの養成講座に参加した際に子どもがいない方もいらした。ホームスタート・ジャパンは原則として「子育て経験のある方」で、その他の資格は特に必要はないと定めており、「子どもに関わる活動や仕事に携わった経験のある方も参加できる」とホームページに記載されている。申し込みのあった方は子育て経験はないが、子育てに関わる仕事をしていたため参加可能のようだった。さらに、通常の講座に参加が難しい人に対しては補講の調整を行う場面も見られ、参加条件といってもそれほど厳しくはないようだった。ホームビジターはボランティアのため報酬はないが利用者宅までの交通費は一律で支給される。

### 第2項 ホームスタートの申し込みから活動の流れ

ホームスタート利用開始のための申し込みパターンは主に3通りある。1つ目は、保健師からの紹介を受けての申し込みだ。乳児家庭全戸訪問事業や乳幼児健診などで保健師の方からホームスタートの説明を受けて実際に使ってみたいと思う人が連絡をしてくる。この経路での申し込みが最も多い。2つ目は、地域にあるチラシを見つけたり口コミを聞いたりして気になった本人が申し込みをしてくるパターン。3つ目はひろばに訪れた親子がホームスタートの存在を知り、利用を試みる人。利用者本人が連絡する点は変わらず、主にこの3通りがあげられる。

ホームスタートでは基本的に計7回の訪問で利用者と約2ヶ月間関わる。まず利用者本人の利用申し込みを受け、オーガナイザーが利用者宅へ訪問する。この場ではホームスタートの訪問支援について改めて説明し、具体的にどのようにホームビジターと過ごすか一緒に決めていく。全国共通のシートが存在しておりその際はそちらを活用する。初回訪問

後、オーガナイザーの裁量によってホームビジターとマッチングし、利用者宅訪問前に2人で打ち合わせをする。打ち合わせを終え次第、紹介訪問としてオーガナイザーとホームビジターが利用者宅を訪ね、訪問日程の調整や活動内容の確認を行う。さらにこの紹介訪問では利用者とホームビジターがお互い呼び合う名前を決めたり、駐車場やお手洗いの確認を行ったり細かいことも話し合う。紹介訪問が終了すれば、ホームビジターのみの家庭訪問が始まる。この訪問数は人それぞれだが、週1回2時間程度、およそ4回としている。内容は「傾聴」と「協働」を根底に、個人のニーズに合わせて決められる。家庭訪問終了後はホームビジターが毎回オーガナイザーに報告書を提出する。

ホームビジターによる家庭訪問が終わるとオーガナイザーが再び訪問し、支援内容の振り返りを共に行い感想を共有する。この訪問によって延長を決めた利用者にとっては中間訪問、終了する利用者には最終訪問となる。利用者の振り返りの次はホームビジターの番となり利用者がオーガナイザーに話していた感想をホームビジターにフィードバックする場面がある。ホームビジター自身も活動を振り返ってもらうことで次の活動へと繋げていく。

### 第3項 利用者とホームビジターとのマッチング

ホームスタートの活動において重要となるのが利用者とホームビジターのマッチングでもあるといえる。オーガナイザーが初回に感じた利用者の雰囲気や年齢、ニーズに合わせてホームビジターを選ぶ。ホームビジター登録の際に個人のことを細かくヒアリングしているため、細やかな配慮もなされている。例えば、たばこやペットが苦手、エレベーターがない家は体力的に厳しい、ひとり親の気持ちに寄り添えるか分からないから避けたい等、少しでも気になることがあれば記入してもらうため、適切なマッチングに繋がっている。これによって、一緒に料理を作りたいという利用者には料理好きな人、子どもが2人で手が足りないから一緒に公園に行って遊んで欲しいということであればアクティブに動くことが好きな人、話を聞いて欲しいという思いが強い人には傾聴上手な人を選ぶことが可能になる。希望の時間帯や距離についても考慮するが、オーガナイザーがホームビジター養成講座で感じた特徴やインスピレーションを大事にしながら総合的に判断している。

さらに、ホームスタート・はくさんの拠点である白山市は年間の出生数はおよそ800人で、ホームスタートを利用する方は35~40件程だという。これに対し、ホームビジターは今回養成講座を受講した6期生を新たに加えると約60名が在籍することになる。そのため、一年間のうち担当しても一人1,2件か全く活動がない場合もある。しかしこれに対して川上さんは「ホームビジターが増えればその分色々な個性を持つ利用者の方に適切なマッチングが可能になる」と語った。実際、ホームビジター養成講座で行われた先輩ビジターとの交流会に参加されていた方は日中仕事をしているためほぼ夜専門で活動しており、オーガナイザーとしても頼りになっていると語られた。このように、多くの人に活

動へ賛同してもらうことでホームスタートの活動の充実に繋げるためにホームビジター養成講座を継続して開催しているようだった。

## 第5節 ホームビジターの存在

### 第1項 ホームビジターの養成

ホームビジター養成講座は全国共通のシラバスに則って各団体が講座を開催する。内容はホームスタートの意義、地域の子育て情報、ホームスタートの活動指針や実務について、傾聴の実践等幅広い。講師はオーガナイザー以外に白山市職員の方や大学の教授も招かれた。ホームビジターになる意思がある人であれば誰でも無料で参加できる。

表4-3 ホームビジター養成講座開講日<全8回>

1日目	9月7日(木)	「オリエンテーション」 「ホームスタートの内容、意義を学ぶ」	オーガナイザー
2日目	9月15日(金)	「家庭とはなにか、親とは何か」 「子どもの理解」	米川 祥子氏 金城大学短期大学部幼児教育学科教授
3日目	9月21日(木)	「傾聴の意義と方法」	米川 祥子氏 同上
4日目	9月28日(木)	「家庭で活動する上でのポイント」 「ホームビジターの実務」	オーガナイザー
5日目	10月5日(木)	「地域連携のために」  「問題や悩みのある家庭への理解」	オーガナイザー 白山市いきいき健康課 白山市子ども総合相談室 白山市発達相談センター
6日目	10月12日(木)	「家庭の中で活動する」	オーガナイザー
7日目	10月19日(木)	「シェアリング・修了テスト」 「修了式、登録、交流会」	オーガナイザー
8日目	10月下旬	「修了後の個別面接」	オーガナイザー

参加者からの関心度が高かったホームスタートの基本姿勢の一つである「傾聴」については3日目に金城大学短期大学幼児教育学科教授の米川祥子氏を招いて専門的な話を交えながら講座が開かれた。講義以外のペアワークやグループワークの時間が多く取られていることで「傾聴」の効果を実感しながら参加者たちへ理解を促す場面がいくつもあった。ホームスタートの支援を求める人は話を聞いて欲しい人が多く、問題を抱えている人が気持ちを分かってもらえて、安心して気持ちを吐くことができるようになることを目指す点が重要視される。また、相談の対応はアドバイスをしてあげることではないことが語られた。相談対応は困っている、弱っている相談者(ホームスタートにおいては親)にまずエンパワメントしてもらうことを目指し「自分の事を分かってもらえた」と感じてもらうことによって

自力で問題解決に向かう勇気を生み出すことが大切だという。

ホームビジターの実務についてはオーガナイザー2名がロールプレイングを参加者に見せることによって想像しやすい工夫がなされていた。このロールプレイングで詳しい説明がされたが、参加者がイメージをしにくい部分があった場合には質問に答える時間が十分に取られており、丁寧に回答していた。この場面で多くの質問が飛び交ったが曖昧にすることなくオーガナイザーは全てに回答した。

現在の白山市の地域情報を確認する場面もあった。ホームスタートは利用者が普段暮らしている家庭に訪問し一緒に過ごすという活動であるため、普段の日常生活の中に入り込む支援である。そのため、利用者は地域のお店や公園、病院の情報を必要とする場合がある。そこで白山市の子育てに関する情報がまとめられたガイドブックを用いて全員で確認を行った。講座の後半になると、架空事例を用いたグループワークも行われ実践的な内容も組み込まれていた。参加者はホームビジターとしてできることは何か考え発表し、オーガナイザーが実際の経験を例に挙げながらフィードバックを行った。

講座は子育てに関する知識を学ぶ内容もあれば、ホームスタートについてオーガナイザーの思いが参加者に伝えられたり、活動上の注意点、相談援助において巻き込まれないような心理的な考え方を学んだり多岐にわたった内容であった。加えて、全体的に見ても参加者から質問ができる場面は十分に設けられていた。毎回講座の後には振り返りシートを提出するのだが、そのシートには「感想、印象に残ったこと」「意見・質問」の欄が準備されている。提出したシートは次回の講座の最初にオーガナイザーが丁寧にシートへの感想や質問へ回答して返却される。これによって、オーガナイザーは全ての参加者と意思疎通を図ることが可能になっていたと考える。

講座参加者の年齢は幅広く、30代が2名、40代が5名、50代が3名、60代が2名だった。そのうち普段お仕事をされている方は9名で、ほとんどがシフト制で勤務されていた。講座は毎週木曜日に一日かけて行われていたため、自然とシフト制で働く方たちが集まったと考えられる。また、ホームビジターは子どもに関わる活動内容でもあるためこれまで子どもに関わる仕事に就いたことがあるか質問を設けたところ「はい」と答えた人が9名だった。具体的には保育士や看護師が挙げられた。さらに子どもに関する資格を持っている人は6名。ほとんどが保育士と幼稚園教諭の資格であった。参加者の子どもはすでに成人している方もいれば、まだ保育園に通うような幼い子どもをお持ちの方も2名ほどいらっしゃった。1名のみ子どもはいないが、一般財団法人児童健全育成推進財団が認定する「児童厚生二級指導員」の資格を持っており、児童厚生員として務めた経験のある子どもへの関心度の高い方が参加されていた。

講座参加者がホームスタートを知ったきっかけについて質問したところ12名中7名が白山市の広報LINEで知ったと回答した。追加インタビューで白山市の広報LINEに関して尋ねると、新型コロナウイルス感染症の情報が知りたいということで追加したと2名の

方から回答があった。コロナ禍の影響で白山市の公式 LINE が浸透し、それを通じてホームスタートの周知がなされていたといえる。

続いて、ホームビジター養成講座に参加しようと思ったきっかけについてはそれぞれ異なる回答が得られた。アンケート回答の中に、ホームビジター養成講座参加へのきっかけが自身の生い立ちの影響からという人もいらっしやり、追加インタビューで詳しく尋ねた。この方（以下 C さん）は幼い頃に両親が離婚した経験があった。その後すぐ父親が再婚して新しい母親ができ腹違いの兄弟 3 人がいる家庭で育った。新しい母親は C さんに暴力を振るうようになり成人してからは実家と距離を置くようになった。その後 C さんは結婚したが、子どもが生まれ子育てをしても子どもを素直に可愛いと思えないことが不思議で悩みだった。この悩みは誰に相談しても真面目に答えてもらえず子どもと一対一でいると自分も子どもへの暴力を繰り返してしまうのではないかという不安もあったようだ。虐待の連鎖についてずっと悩んできたからこそ虐待に関する報道があると母親を思っただけで複雑な気持ちになることがあった。このような経験から C さんは現代社会において問題を抱えている子育て家庭が気になり、子育ての難しさを感じている人たちのお手伝いをしたいという気持ちを長年持っていたという。そこで有償ボランティアや子育て支援で自分が手伝えそうな取り組みを探していたが見つからなかった。その時、白山市からの LINE でホームスタートについて知り、詳細を見たところ「問題や悩みのある家庭への理解」という講座内容が目にとまり申し込みに至ったという。同じように子育てで苦しんでいる人がホームスタートを知ることで別の支援に繋がられるきっかけとなることを期待し、ホームビジター養成講座に申し込んだことが語られた。

他にも「講座内容に興味を持った」「自分ができること誰かの役に立ちたい」という気持ちがきっかけとなった方もいた。自分の子どもの時の経験や大人になってからの子育て経験からホームビジターへ関心を持ち、助けを必要としている人の役に立ちたいと思う人。また、講座内容自体に関心があり自分の学びの一つとして参加した人。以上の大きく分けて 2 通りのきっかけがあった。

## 第 2 項 オーガナイザーが望むホームビジターの姿

川上さんはホームビジターに子育て中の親の緊張を解す存在となることを求めていることがインタビューで分かった。ホームビジターと過ごす時間によって親の心に少し余裕が生まれることで、子育てに対してポジティブな思いを持ってもらいたいという願いも語られた。さらに、ホームビジターは利用者との関わりの中でその人の強みを見つけ出し、本来持っている力を引き出す存在として活躍して欲しいともホームビジター養成講座内で参加者に向けて語っていた。これによって利用者もホームビジターもお互い心地良くなり、関係性の構築にも繋がるという。

以下の語りに「おばちゃん」というワードが登場する。これは川上さんの中では地域の  
おばちゃんという認識で、世話好きで明るいイメージがあると思われる。例えば、医者や  
保健師のように堅い関係でなく気軽に何でも話せて相談できるというフラットな関係性が  
築かれることを期待しているのだと考える。さらに、ホームビジターは子育て経験者であ  
ることから説得力も強く、そのような人から親自身と子どもを認めてもらうような言葉を  
かけられることで気持ちが上向きになる効果が得られているように考えられる。

ホームスタートって代わりにやってあげることじゃなくて一緒に過ごして話をしながら  
ビジターさんっていう素人の人だけど、内側にはちゃんと講座を受けた専門性を持って  
いる。当事者性、素人性のおばちゃんがいて、「いいところもあるね」「こんなところも  
頑張ってるね」とか実際に見てね。「大きくなったね」「この間よりも笑うね」とか。ち  
よっとしたことがお母さんの気持ちをぐっと引き上げてくれる。

また、上記の語りには「専門性」というワードも出てくるがこれは養成講座内で学ぶ地  
域の子育て情報や傾聴スキルといった親子に寄り添う力に関する専門性だと考えられる。  
ホームビジターは無資格でも活動可能なため助産師や保育士などの資格並みの知識に関す  
る専門性については重視していない。川上さんは専門性があると、逆に親に自分の知識を  
押しつけてしまう可能性がありホームスタートの目的である「親への寄り添い」が達成で  
きないことを懸念していた。

しかし、専門職であってもホームビジターとしての活動を望む方がいらっしゃる。実際  
にホームスタート・はくさんには助産師の仕事しながら活動を行っている方がいるそう  
だ。その人に対しては利用者がどのような目的で支援を望んでいるのか立場を明確に伝え  
る。もし利用者が近所の先輩ママとして一緒に居て欲しいと望むならば先輩ママとして。  
子どもの成長について専門的なアドバイスが欲しいと思っているのならば、指導的にはな  
らないで、緩やかな形でフィードバックをするようお願いしているようだ。

以下はホームスタートの利用者が引っ越しをすることになった時のエピソードである。  
引っ越し当日にホームビジターが手料理を持って見送りに来てくれたという。さらに利用  
者本人からの手紙に「お母さんがいてくれた感じが良かった」と書かれていたことより、利  
用者はホームビジターに対して感謝の気持ちを強く抱いていた。

お母さんが転職になって引っ越しするんだっていう時に、ビジターさんと最後にもう一  
回会いたいなっていう話になって。(中略) 当日の朝、駅まで行ったらビジターさんがお  
いなりさんを作って持って来てくれて。いつでもまた連絡してねって言ってくれた。親  
は遠くにいて自分の子育てのところに親はいなかったけど、本当にここでお母さんがい  
てくれた感じがあってっていうお手紙くれて。

### 第3項 現役ホームビジターの活動中における利用者との距離感

現役ホームビジターのBさんは子育てをしている娘さんがいるということもあり、利用者との関係が娘に会って孫を見ている感覚に近いと語った。さらに、Bさんは経験したことのある保育士と比べてホームビジターはより個別に関われる点を評価していた。

Aさんは、活動の回数を重ねるごとに友人では聞けないような話をすることもあるという。基本的にはオーガナイザー川上さんがインタビューで望んでいたように、近所のおばちゃんという感覚で接しているそうだ。利用者の方と話していて夫に話すと「そうなん」で終わるようなことでも、ホームビジターは子育てを経験しているからこそ「そうやよね」「大変やよね」という言葉掛けが利用者にとっては救われた気分させるのだと考えていた。関連して、自身の子育て経験が役に立っているかの質問についても自分の子育て経験から得た知識を押しつけるのではなくて一つの安心材料として例え話として提供することが多いと語られた。

基本的には訪問活動中に利用者とホームビジターが連絡先を交換することはトラブル防止の観点から禁止されており、活動終了後にオーガナイザーを通してお互い交流を続けたいとのことであれば連絡先の交換をすることができる。しかし、活動終了後に個人的に連絡を取っている人は少なく、一部InstagramやLINEで連絡先を知っている方もいるが、高頻度でやりとりすることはないそうだ。Aさんは仕事の関係で子どもの食事用品のフリーマーケットをやることになった際に連絡をして会う機会があったり、Bさんは街中で会ったときに声をかけてもらうことがあったりしたと語ったが、活動終了後も密に連絡を取り合う様子は確認できなかった。

### 第4項 活動中のホームビジター本人のやりがい

ホームビジターとして本人たちが活動する際、自分が何かしてあげるという意識はそれほど持っておらず自分たちが活動の中で楽しむ姿勢でいることが明らかになった。これまで記憶に残っている親子について現役のホームビジター2名に尋ねたところ、Aさんは子どもがあだ名で呼んでくれたり手を振ってくれたりするのに愛おしさを感じて、早くお家に行きたいという気持ちになった経験を語った。Bさんは利用者の方と一緒にコストコや公園など色んな場所に行ったことが印象的で、普段自分だけではできない経験ができたことだと語った。お二人とも活動中に自分が楽しさを感じられていることがホームビジターを続ける原動力になっていることが分かる。

### 第5項 オーガナイザーとの関係性

オーガナイザーはホームビジターにとって重要な存在であると認識されていることが改めて確認できた。ホームビジターとしての活動を終えた時の感情についてホームビジターの方に尋ねた。AさんもBさんも利用者さんによって異なるとのことだったが、中にはこのまま終わっても大丈夫か心配になる方もいるという。それでもホームビジターとして活

動を終了すれば「オーガナイザーさんがおるからそこは自分で抱え込んでも良い」と思えるため、責任を感じすぎないためにオーガナイザーの存在は大きなものとなっていたことが分かる。また、ホームスタートは守秘義務・プライバシー保護の観点から利用者の情報はオーガナイザーとホームビジターのための共有で留めなければならない。ホームビジター同士で担当している利用者の話をするのはもちろんホームビジター自身の家族に話すことも許されない。利用者について話したいことがあればオーガナイザーだけに伝えるようホームビジター養成講座でも強く言われていた。そのため現役ホームビジターの方によると、訪問してモヤモヤする気持ちが生まれた場合には活動終了後にオーガナイザーに電話をしたり、直接あさがおに行きオーガナイザーに伝えて家庭には持ち込まないようにしたりしているとのことだった。ここでもオーガナイザーが話を聞くことによってホームビジターの心に負の感情が蓄積されないようにサポートしており、活動を継続していくための重要な支えとなっていることが分かった。

さらに、Aさんはホームビジターを始めたばかりの頃は分からないことが多く、訪問途中でオーガナイザーに連絡することもしばしばあったそうだ。回を重ねるごとにイレギュラーな対応にも慣れてきて訪問途中での連絡はなくなっていったが、その回の訪問終了後にモヤモヤした気持ちがあった際は電話で「こんなん言われたけどどう？」と聞くことは未だにあると語られた。また、訪問して不在だったときにはオーガナイザーに連絡しオーガナイザーから利用者へと連絡をするという。利用者とは直接連絡を取り合う必要がなく、オーガナイザーが必ず中間に入ってくれることで、トラブルの発生を防ぐ事にも繋がっている様子だった。

## 第6節 ホームスタートと行政との連携

国の訪問支援事業の一つに、生後4か月までの乳児のいるすべての家庭を訪問し様々な不安や悩みを聞き子育て支援に関する情報提供等を行う乳児家庭全戸訪問事業が存在する。さらに白山市にはこの事業とは別に民生委員が家庭を訪問し様子を見に行く。しかしこれらにも限りがあり、訪問した際に困難家庭でなければ次の支援に繋がらない。ひろば型の限界の理由以外にそのような支援の対象から外れてしまう家庭を対象にできるという期待からホームスタート導入へ至ったことも確認できた。

ホームビジター養成講座では白山市の保健師・児童相談所の職員を講師として招く日もあり、行政側の人間から行政では対応が困難な家庭への支援策としてホームスタートが重要な役割を担っていることが語られた。さらに、民生委員が訪問する際にホームスタートのパンフレットを配るなどして認知してもらえよう行政との協力体制が整っており。白山市とホームスタートは強固な協力関係が築かれている。

講座で講義を行った保健師の方によると、行政としての支援スタートのタイミングは母子手帳交付の時で、この際に妊婦の状況把握を行い、どのタイミングで支援が必要かを決定する。しかし公的な機関としては、困っている内容によって保護者への支援スタートの優先順位がついてしまうという。専門機関だけでは支援は完結できず、日常の中でも支援ができるようにするためにホームスタートが機能すれば、公的な支援が届かない隙間を埋めることができると説明した。例えば、本人や周りが困っていると声を上げている場合、保健師や助産師が訪問して事例の程度を見極める。そこで、ホームスタートや産後ヘルパーの利用が効果的であればこれらの利用を勧める。あさがおはホームスタートも産後ヘルパー事業も行っているため、保健師の方からの相談を受ける機会が多いそうだ。

家庭児童相談室職員の方による講義では、ホームビジターへ家庭内に入っておびえた様子や身体的外傷を見つけたらオーガナイザーに報告して欲しいというお願いが講義の最後になされていた。ホームビジターは家庭というプライベートな空間に入ることができる貴重な存在である。そのため家庭内の些細な異変に気がつける可能性が高く、関係機関が連携して支援を開始することに繋がる。以上から、ホームスタートは家庭の問題が起きている要因となる環境を改善する支援の第一歩としても機能することを行政側から期待されていることが分かる。

## 第7節 ホームスタートと他事業

### 第1項 ひろば型との関わり

あさがおが位置する白山市には地域子育て支援施設が16カ所あり、親子が一番近い場所へ集まるため地域性が生まれる。毎回顔を合わせることによって、グループができてくることがある。新しくひろばを訪れる人の中には、コミュニケーション力の高い母親もいれば、なかなか輪に入っていけない母親もいる現状に対して、スタッフの力が大きい。スタッフと親子の関わりについて、以下のように語る。

*スタッフはジョーカー、トランプで言えばね。だからババなんだから、必要かなと思っただらいいんだけど、もうババいらないと思ったら抜ければいい感じ。ババのように影のようにすっと抜けたり入ったりみたいなことを繰り返してる。*

川上さんはスタッフをトランプの「ジョーカー」という言葉で表現した。これは親子がひろばに馴染めていないと感じればスタッフが親子に付いて他の親子と交流できるように促す行動を取り、スタッフが入ることで場が上手くまとまって親子同士で問題ないと感じれば抜けるといった特徴を表しているのだと考える。

しかし、常に一人に付き添うことはできないためホームスタート導入前にもひろばの利用者宅に行って話を聞く場合もあったという。一人一人に合わせた支援は以前から需要があったことが分かる。その点、ホームスタートは利用者とホームビジターの個人同士で関わり、親のニーズを満たすことを目標とする一人一人に合わせた支援内容となる。この関係性からスタートし、ホームビジターと一緒にひろばに行くことで雰囲気をつかんでもらう。この段階が母親の自信にも繋がり一人で行けるような手助けにもなる。ホームスタートを導入するきっかけとなったひろばに出て来られない親子に対してアクセスし、ホームビジターの力を借りることによってひろばへ来てもらうことが可能になっていた。川上さんが望んでいたことがホームスタートによって実現できたといえる。ただしホームスタートがひろばの利用に繋がるきっかけ作りになるとはいえ、必ずひろばを利用して欲しいという押しつけではなく、何かあったときに知っていて気楽に行ける場であることを認知してもらうことを大切にしている語りもあった。

### 第2項 産後ヘルパーとの関わり

ホームスタートは「協働（一緒に家事や育児をする）」という基本理念があることから家事や育児を完全にお任せしたいという申込者にはどのような対応をするのか質問したところ、明らかにホームスタート本来の目的から外れる申込者は少ないとの回答が得られた。しかし要望のある人へは産後ヘルパーを勧め、その後ホームスタート支援へ切り替えると効果的であると語られた。ホームスタートは家事育児を一緒にすることが主な活動のため産後の身体が辛いときは全てヘルパーに任せてしまい、自分でやりたい気持ちが出て

きた時にホームスタートに切り替えてホームビジターと一緒に子育てのやり方を見つけていく。ホームビジターと一緒にいることで「この調子で良いよ」「無理しなくても良いんじゃない」という声かけが子育てを始めたばかりの親の孤立感を薄れさせ、精神的なサポートに繋がっているといえる。

また、ホームスタートの限界について質問したところ、できること、できないことの明確な線引きは決まっていないという回答だった。基本的には親、子ども、ホームビジターの三者が同じ空間にいることが求められる。例えば、ホームビジターがヘルパーの作業を代替することはできない。代わりにごはんを作って欲しい、疲れていて休みたいからその間公園に行ってきた欲しいという要望は叶えられない。しかし、親がご飯を用意する傍らでホームビジターが子どもを抱っこしながら、喋りながらという様子は常時見られるという。現役のホームビジターからは二人の子どもがいる家庭へ訪問した際、親が子どもを抱っこしながらテレビを見ていたため、同じように自分ももう一人の子どもを抱っこしながらテレビを見る時間があったと語られた。親はテレビを見ているうちに少しずつ話し始め、傾聴を行ったとのことだった。このようにホームビジター自身も何かやってあげる意識ではなく一緒に何かをやる意識が強いため「代わりにやってほしい」という要望が明らか場合はヘルパー利用を勧めるそうだ。

### 第3項 ホームスタート終了後の関わり

訪問活動終了後にホームスタート利用者があさがおのひろばを利用するようになることはもちろんあるそうだ。しかし、自宅からあさがおが離れている場合は地域の保育園や社会法人、児童館を利用するパターンもあるという。活動終了後にひろばのような場所に必ず繋げないといけないということではないそうだが、ホームスタートが利用者に対して自発的に外に出てみようと思わせるきっかけになっているように感じると川上さんから語られた。

さらに、ホームスタートでの様子を保健師と共有し引き続き様子を見守ることもある。オンラインの講座の案内をする等子育てに関わる情報を共有しながら見守り続けるようにしているそうだ。たまに電話をして近況を聞くこともある。そこで「また何かあったらいつでも言ってもいいよ」という声かけをすると利用者がある時に思い出して、近況の報告や相談の電話がかかってくることもあるという。利用終了後もオーガナイザーは利用者と緩やかな繋がりを持ち続け、ホームスタートを利用した人へ子育て情報や他支援について伝えるようにしていた。

## 第8節 子育ての孤立感とホームビジターの傾聴

川上さんは現代の子育て状況について、昔のように血縁関係のある中で子育てをする環境でないことは親の孤立感を高めやすく、子育ての中で最も悲しいことが孤立であると語った。さらにひろばに来ていて順調そうに見える母親も詳しく話を聞いてみると家に帰ると孤立感があり、しんどさを感じていたと分かることがあったという。母親は一日中ひろばにいて孤立感を解消させようとしていた。このように、ひろばに来ることができていて問題がなさそうな親も、詳しく話を聞いてみると辛い孤立感に耐えているという現状がある。第4章第2節表4-2から分かるように、ホームスタートのニーズは「孤立感の解消」が最も多い。ホームスタートの3つの理念の一つにも「子育て家庭の孤立防止」が含まれており、「孤立感」は全ての親に共通する悩みであり多くの人が助けを求めているのだといえる。

講座内では「どのような時に孤立感を感じた経験があるか」というテーマでグループワークを行い、孤立感について深く考える時間が取られていた。子育て経験のある参加者たちは子育ての際に感じた孤立感を話し合い、具体性のあるワークを行っていた。参加者からは「コロナ禍でどこにも行けなかった」「毎日子どもと一対一で会話できる大人がいなかった」「仲間はいたけれど友人同士だと子どもの発育など本当に不安なことは相談できずに心細さを感じていた」など様々な意見が出た。この意見からも分かるように、講座参加者から次々と子育て中の孤立感の実体験が挙げられ孤立感は誰もが持ちうるものであると確認できた。この意見に対して自分が子育て中に孤立を感じた時、どのような声かけをしてほしかったか当事者の立場に立って話し合いも行われていた。自分の子育て中の辛い経験がホームビジターとしての活動へと活用できるワーク内容だった。

以上に述べたようにホームスタートはどのような場面で孤立感を持つのか個人の意見を共有し合うワークによって他者を理解したり受け入れたりする傾聴スキルを高めているといえる。実際、現役ホームビジター2名へのインタビューでは傾聴に関する研修を受ける前後では考え方に大きな違いが現れていたことが確認できた。Aさんは子育て相談に対しては何かしら答えを出してあげないといけないという意識を強く持っていたようだ。しかし傾聴のスキルを身につけ、それを活動内で実践してみると、相手の話を聞いて「大変だったね」「頑張ってるね」という言葉掛けをするだけでママたちが元気になっていくことを実感したという。Bさんも発達相談支援の仕事をしている際には答えを伝えてあげないといけないという思いがあったそうだが、ホームスタートでは答えがなくても良いことに大きな違いを感じていた。

このようにホームビジターの声かけや共感によってエンパワメントされ、孤立感の解消に繋がることがこれまでのホームスタートの事例で実証されている。また、全く子育てをしたことがない人だと説得力に欠けるが、実際に経験があることに加えて他者受容性も身につけたホームビジターによって孤立感の解消が可能になっていると考えられる。

## 第9節 ホームスタートの課題

ホームスタートの今後の課題についてオーガナイザーの川上さんに質問したところ、まず「周知」が課題であると回答があった。オーガナイザーはホームスタート関連の業務だけに集中できるわけではなく、他の事業も担当しているため他の業務とのバランスが難しい。他の事に手がかかって周知がおろそかになることもしばしばあるそうだ。周知をしているつもりでも本当に届けてあげたいところに確かに届いている確証はなく、改めて周知の仕方を工夫していく必要がある。加えてホームスタートが白山市内で有益で良かったと思ってもらえるようにしていきたいとも語られた。ホームスタートの対象となる人は入れ替わっていくため、「周知」は継続していく必要があるだろう。そして周知できたとしても事業への信頼感がなければ利用してもらえないことから事業の信頼度を上げていくことも課題として考えられていた。

また、ホームビジター養成講座参加者は初回の講座開始時点ではホームスタートに興味がある程度で、詳しい活動内容について知識を持っている人はほぼいない。さらに、今回講座に参加した方で身近な人からの周知による認知は1名だけだった。このようにホームスタートを周囲に説明して周知できる人はまだまだ少ないと考える。この点を改善するために、ホームビジター養成講座での学びが役に立つ可能性がある。川上さんは今回の講座を受けた人たちに対してホームビジターとして活躍することはもちろん、ホームスタートの良き理解者として活躍して欲しいとの願いが語られた。講座を受けることでホームスタートに対しての理解が深まり、困りごとがある家庭へホームスタートを提案することができるようになるという。参加者へのアンケートの「講座を受けて理解が深まったことでホームスタートの周知をしていきたいと思いませんか。」という質問に対して、すべての人が「はい」と答えている。この回答から、講座に参加した人たちはホームスタートの活動に意義を感じていることが分かる。この点からも、ホームビジターの養成講座がホームスタートの周知に協力してくれる人材を育成する場として機能しており、継続的な講座の開催は効果的だといえる。

さらに、もう一つの課題として、普及があげられた。現在、北陸三県ではホームスタートに取り組んでいる団体は石川県内の2団体のみである。ホームスタートを実施していない市町村に住む親からもホームスタート・はくさんに支援をお願いする声も届いているようで、需要が高まっているため川上さんは普及を望んでいる。住む地域によって支援に差がある点を改善したいという思いがある。

また、山田(2022)によると、ホームスタート・ジャパンは6歳以上の家庭へのプログラムを開発しており、2023年以降全国で活用できるようにしていくという記述があった。しかし、現在(2024年3月時点)は2025年以降の活用を目指している。

ホームスタート・はくさんでも学齢期のホームスタート支援について問い合わせがあるようで、川上さん自身需要を実感していたことから、学齢期のプログラムの導入には肯定的だった。加えて、ホームスタートの仕組みは子どもから高齢者までの全年齢に対応でき

るものと考えている。現在ホームスタートは子どもの支援の充実を目指しているが、川上さん個人としてはいずれ包括支援に繋がる可能性を見出していた。さらに、ホームスタート・ジャパンのホームページによると、2023年にホームスタートは「10年計画・3年戦略」と題した中期計画を定めたそうだ。3年後に145地域、10年後に300地域に広げるという目標を掲げており、日本全国への普及に力を入れている。

## 第5章 考察

### 第1節 傾聴と協働

オーガナイザー川上さん、現役ホームビジター2名へのインタビューから、ホームスタートの基本手法として掲げられている「傾聴（気持ちを受け止めながら話を聞くこと）」と「協働（家事育児を一緒に行う）」がやはり重要であると分かった。さらに、ホームビジター養成講座を受講した参加者も「傾聴」「協働」に対しては重要性が高いことを実感していた。

#### 第1項 傾聴

多くの親たちは一日中子どもと向き合い続けることで孤立を感じながら育児に取り組んでいるが、孤立感を持ちながら取り組む育児は精神的負担を倍増させる。そこでホームビジターが日頃の子育てに関する思いを傾聴し、それに対して「頑張っている」「できている」等の親としての働きを認める言葉掛けや共感をすることによって、親たちは自信を取り戻す。ホームスタートの活動が「承認の場」として機能し、当たり前の親の姿として見過ごされないことが親へのエンパワメントに繋がっている。

また、ホームスタートではホームビジターが4回の訪問を行い活動終了となるため、限られた4回でホームビジターと利用者は信頼関係を築く必要がある。ここで重要となる要素が「傾聴」であると考えられる。ホームスタートへの申込者は話を聞いて欲しい人が多いものの、初回から話してくれる人は稀であり、安心して気持ちを吐露できるようになる関係性が不可欠である。相談者は自分が話したことに対して共感してもらうことで自分を分かってもらえたような気持ちを感じ、相手に心を開き始める。そのため、傾聴を初回から継続することで徐々に信頼関係を構築し、親たちの本当の気持ちを最終までに引き出し、寄り添うことがホームビジターの役割である。親たちの思いが引き出されることはその人を取り囲むありのままの現状を知る手段ともなり、活動を通して親が抱える根本的な悩みを知ることに繋がる。これをホームビジターがオーガナイザーに報告することでオーガナイザーは適切な支援を利用者に提案することが可能になると考える。そのため傾聴は特別なものではなく、ホームスタートとして活動する上では当たり前に取り込まれるものであるといえる。実際にCさんにインタビューを行ったところ、行政に相談しに行ったこともあったがその後の支援に繋がらなかった経験があったという。Cさんは子育てにおいて深刻な状況だと感じていたため、もし当時ホームスタートの活動があっても傾聴だけで前向きな気持ちになるまでは至らなかっただろうと語った。ただし、傾聴によってオーガナイザーとホームビジターにCさん自身を取り巻く状況を理解してもらうことで、何らかの適切な支援へと繋がるきっかけになったかもしれないと語られた。

しかし、ホームビジターは子育て経験者のため無意識のうちに自分が経験してきたことを押しつけがちなこともある。傾聴を実現するためには自分が持っている価値観は自分のものでしかないことに気がつくことが重要である。ホームビジター養成講座内では

各々の子育てを振り返り共有する場面があり、様々な他者の考え方について触れることで自身の固定観念の払拭に繋がる。その結果、支援中は自分が経験したことをただ参考例として話すことが良いと理解し、傾聴をもとに利用者が本当に望む支援内容に寄り添っていく。実際、ホームビジターのインタビューでは自身の経験を一つの安心材料として語っていることが明らかになった。

以上のように、ホームスタートにおいてはまず傾聴で相手に寄り添って話を引き出し共感することが最優先である。傾聴のみで少しでも負担を軽減させることができれば良いが、深刻な家庭に対しては傾聴によって引き出した情報を活用することで適切な支援を行うことができる。傾聴はホームスタートの活動を行う上で支援の出発点となっていると考える。

## 第2項 協働

ホームスタート・はくさんにおいて、訪問終了後も利用者が一人でも子育てを続けていけるように協働（一緒に育児家事を行う）が常に意識されていることが分かった。誰かに任せっきりにしては、その誰かがいなくなったときに自力で対処できないという考えが語られた。

「協働」について具体的な事例として引っ越してきたばかりの利用者を挙げて説明する。引っ越してきたばかりで周りに頼れる人もおらず、子どものことだけで手一杯であることに加えて引っ越しの荷物の片付けも残っている。このような利用者宅へ訪問した際、ホームビジターが率先して片付けてあげることはないが、利用者の様子を見ながら「一緒に片付けてみる？」という声かけを行うことはあるそうだ。自分一人でやるには大変なことも誰かがいることで動き出すきっかけとなり、ホームビジターは親の主体性を引き出す手助けをしているに過ぎない。親が主体的に問題に取り組むことで、次の引っ越し先でホームスタートのような支援がなくても同じ問題に直面した時に問題の解決方法が分かるようになったり、前もできたから大丈夫という余裕が生まれたり親が本来持っている力を引き上げることに繋がる。このようにホームスタートでの「協働」とはホームビジターと一緒に子育てをこなしていくことで手段・方法を学び経験を積んでいく。起こっている問題に対してその場限りの対処法を実践するのではなく、「協働」によって今後も役立てていけるような学びと親の自信を提供しているといえる。

また、ホームビジターが子育てに関する専門的な知識は不要という考えも「協働」が関わっていると考えられる。ホームビジターと利用者は対等である関係性が望ましく、専門的な子育ての知識が入ってくると両者の対等性が失われてしまう可能性がある。教えてもらうというよりも子育て経験のある普通の人と一緒に子育てをするという感覚が親に「主体性」をもたらす力を強めていると考える。

## 第2節 無償ボランティアである理由

利用者に寄り添い協働を行うホームビジターは無償ボランティアとして活躍している。無償が選ばれているところには合理的と思われる点がある。1点目は利用料がかからないため利用者側の負担が少ないこと。子育て中に困難さを感じる全ての家庭での利用が可能であり、誰でも気軽に利用できる。2点目はホームビジターの社会参加欲求を満たすことができること。今回講座に参加した方に実施したアンケートでもボランティア活動を通して自分が社会の役に立ちたいという思いが参加動機であった人が複数見られた。3点目はホームビジターを養成するための講習が無料で受けられること。専門性を含む充実した内容を無料で受けられることに加えて、活動開始前に気がかりな部分を複数回の講座によって解消できる点も人が集まりやすい要因になっていると考える。最後は1人あたり年間1、2件の担当であるためホームビジター一人に対する負担が少なく、現在の労働形態とマッチしていること。ホームビジターの申し込みはパートタイムで働いている人がほとんどで、活動と生活の両立がしやすい。これは将来バランスが崩れれば変化していく可能性はあるが現在はこれが適している。以上の1点目を除いた3点によってホームビジターとなる人材が十分に獲得できており、無償ボランティアが採用されている理由だと考える。

### 第3節 訪問型支援であることの意義

訪問型支援であることの意義として4点あると考えた。1点目は、より個別的でオーダーメイドの支援ができる点である。ひろばでは多くの親子が集まってくるため、一人一人に対して職員が十分に話を聞いて解決することは難しく、個人に合わせた支援には限界がある。ひろばは同時期に子育てをしている人たちとの悩みを共有することで生まれる「共感の場」であるといえる。そのため、自分と同じような状況に置かれている仲間づくりの場として機能することもある。一方で、一人の親子に対してホームビジターが一人つくホームスタートの訪問型支援では自分が持っている悩みを十分に伝えることができる。そして悩みに対して自分に合った目標を定められ、そこに向かって一緒に取り組んでいることが可能である。活動中は経験者であるホームビジターからの声かけや共感によって親として認めてもらう実感を得る「承認の場」として機能する。ひろば型と訪問型の支援では機能が異なり、訪問型は個別に対応することで個人の力を引き上げる役割が大きいと考える。

2点目は、外に出ることが難しい親にアプローチできることである。大勢が苦手な人はもちろん、多胎児を持つ親は一人で複数連れて外に出かけることが難しかったり外国人の家庭であったり産後の不調で出かけるのが困難である家庭等様々な理由で外出が難しい家庭があることがオーガナイザーの川上さんより語られた。特に、白山市の特徴として車社会であることが挙げられ、車を持っていない人や運転ができない人も外出のハードルが上がる。結果として、家庭外に出て行くことが困難となり孤立に陥る場合もあるという。しかし訪問型支援では外に出る必要がなく家庭内で支援を受けられるため、誰でも利用しやすいといえる。

3点目は、複数の人間関係の緊張感から解放される良さが訪問型にはあることである。堀(2013)によると、ひろばにおける交流は多くの人に参加し、着飾って他愛のない会話が繰り広げられる。したがって、自分が深刻に感じている悩みを素直に表現できる場だと言い切るのは難しい。加えて、ひろばに来る際緊張したと語る母親も存在していた。一方でホームスタートにおいて利用者はオーガナイザーとホームビジターの2名と関わるのみで、複数人の交流による煩わしさは生まれない。プライバシー保護について講座内では重要度高く取り扱われていたため利用者は安心して自分の話をするといえる。

4点目は家庭内という日常生活が行われている空間に入ることによって密接に関わることが可能になり、問題の根源を見つけやすい点である。具体例としてファミリー・サポート・センター事業(以下ファミサポ)と比較する。川上さんのインタビューにおいてファミサポの利用後に親たちが色々な話をしてくるという語りがあった。ファミサポとは依頼会員と提供会員のマッチングによって成立する相互援助活動で、仕組みとしてはホームスタートと似ている部分がある。しかしファミサポは有償で子ども預かりや送迎を行い、提供会員はほとんどの時間を子どもと過ごす。そのため親の子育ての負担軽減には繋がるが、親と直接話をする時間は少なく、多くの親が抱える孤立感に対してのアプローチは難しい。利

用後の少しの時間で親たちは多くを話そうとするが、短時間では全てを話しきることはできないだろう。しかし、ホームスタートのような訪問型支援は親への支援をすることによって子どもに最善の利益を提供する。つまり、活動内容としては親と話をしたり家事育児を一緒にしたりする親への関わりが中心で、その場に子どもも一緒にいるという感覚の方が強い。ファミサポは困難な子どもの状況に対処する一方で家庭の中に入る訪問型支援のホームスタートは親が置かれている困難な状況が詳細に分かるため、根底から向き合うことができる。家庭とは普段親子が過ごしている日常であり、そこには膨大な情報が溢れているため、訪問型によって起きている状況の原因に注目できることが利点の一つであると考えられる。

#### 第4節 隙間を埋める支援

加藤・請川（2019）では実際に調査を行いホームスタートの隙間を埋める支援における有効性を検討していた。はたして隙間を埋める支援となっているかについて考察していきたい。

ホームスタート・はくさんでは利用者に突出した特徴はなく、強いて言えば多胎児を持つ家庭や母子家庭くらいで、基本どこにでもいる普通の家庭であることが多いという語りがあった。このような困難家庭に当てはまらない一般的な家庭は乳児家庭全戸訪問事業や民生委員の訪問の先の行政の支援には繋がらないまま育児に取り組んでいくこととなる。

ホームビジター養成講座内でも白山市で保健師として働く方からは、行政の支援は夫が単身赴任中の家庭、介護と子育ての両立が必要となる家庭、親が精神疾患を抱えている家庭等、一般的な家庭と比べて支援の緊急性が高い家庭から優先して行政が介入すると語られた。誰もが抱えうる子育てにおける孤立感を持つ一般的な家庭に対しては行政からの支援が後回しとなってしまい支援を受けることは難しいといえる。

例えば、前に述べたCさんの場合（第4章第5節第1項）、本人は「子どもを素直に可愛いと思えない、いつか暴力に繋がらないか」という悩みがあった。しかし、このような悩みがあるというだけでは行政の支援対象として優先度は高くないかもしれない。一方でホームスタート・はくさんのような支援であれば、Cさんのような悩みを持つ家庭も支援の対象となる。もっとも、本章第1節第1項で触れたようにCさんはホームスタートの活動の主となる傾聴だけで悩みが解決することはなかつただろう。けれども、支援活動中にCさんの状況がより深刻になった場合には行政の支援へのアプローチにも繋がるかもしれない。このようにしてみると、子育ての困難さを抱えながらも行政の支援が受けられない家庭に対してホームスタート・はくさんは行政と連携することでこのような家庭へのアクセスを可能にしていると考えられる。

白山市は令和5年1月より出産・子育て応援交付金事業が始まり、妊娠中から出産・子育て期を安心して過ごせるよう伴走型相談支援、経済的支援を一体的に行っている。伴走型支援としては母子健康手帳交付時に面接、妊娠中の面接・訪問（希望者）、産後の赤ちゃん訪問等、妊娠期から出産・子育てまで一貫して家庭に寄り添う支援内容が整えられている。この行政側の支援の中にホームスタートが一つの支援策として取り入れられている。保健師がある家庭へ赤ちゃん訪問を行った際にホームスタートが有効だと判断すれば利用を勧めることもある。また、ホームスタートは妊娠期にまで活動の幅を広げているため行政の訪問を希望した妊娠中の家庭に対して、相談内容に応じてホームスタートと連携することもあるという。

実際に、赤ちゃん訪問で訪れた家庭には上に小学校1年生の女の子がいて、母親は最近その子が学校へ行けていない悩みを抱えていた。このことを担任の先生やスクールカウンセラーへも相談していたそうだ。その様子を見た保健師が地区の担当保健師と相談したところ、母親とその女の子と一緒に過ごす時間を取るためにホームスタートを紹介した。利

用してみると大人と話したことで母親の精神状態も安定し、女の子は兄弟ができたことで赤ちゃん返りしていたことが分かった。夏休みが終わってからは学校に行けるようになったという。

白山市では、これまで乳児家庭全戸訪問事業や民生委員の訪問終了後行政の支援には繋がらない家庭が多く存在していたが、ホームスタートが行政と連携することによって行政の支援は活用できずとも有効な支援を届けることが可能となった。ホームスタートが誕生し、地域資源が充実することによって「隙間を埋める支援」が実現されているといえる。

## 第5節 ホームスタート・はくさんから始まる子育て支援

ホームスタート・はくさんを加藤・請川（2019）の調査対象であった支援センターMの事例と比較すると、根本的な部分は同じことが分かった。支援センターMにおいて、ホームスタート利用者は生活困窮者というよりもどこにでもいる一般的な家庭の利用が多いとされていた。ホームスタート・はくさんでも同様に、特別困難を抱えた家庭より育児に漠然とした不安を抱えている親や誰かに話を聞いてもらいたい親の申し込みが多いことが明らかになった。さらに、加藤・請川（2019）はホームスタートが子育て支援施設の潜在的利用者を能動的に掘り起こすために効果的であると述べている。実際に、ホームスタート・はくさんでもホームスタートから他支援へと繋がる事例が確認できた。

一方で、行政との関わりについては異なる点が発見できた。支援センターMでは行政との連携が課題であると述べられていたが、本章4節で述べた通り、ホームスタート・はくさんではすでに行政との連携が強固であるといえる。この点に関しては、ホームスタート・はくさんを運営するあさがおが当初石川県の中で、ひろば事業の先駆けのモデル事業としてスタートした経緯があったために元々行政との繋がりが深いことが関係していると考えられる。そのため、全てのホームスタートの運営団体が各自治体と関わりを深めることは困難が生じるだろう。以上のことから、ホームスタート・はくさんは行政との関わりが密接である特徴を持つ団体で、これによって白山市全体としての子育て支援が充実してきていると考える。

現在ホームスタートは6歳以下の子どもを持つ家庭だけでなく妊娠期へも対象を広げており、川上さんは利用する子育て支援の第一歩としてホームスタートが機能することを期待していた。ホームスタートは無料で利用できるため、利用のハードルは低く思われる。利用の申し込みさえあれば面談を行うことで個人に適した子育ての方法を提案することができる。現に利用希望者と面談を行い、必要を感じた親子に対して産後ヘルパーの利用を勧めたり、利用者がホームスタート終了後にひろばに通うようになったり、何かしら別の支援へ繋げることが実現できている。さらに、オーガナイザーが個人に合わせた支援を紹介することで自分が利用できる支援について情報が行き届くようになり、具体的な支援内容が鮮明になる。これによって他支援の利用に前向きな気持ちが生まれ、利用までのハードルが低くなっていると考えられる。

また、行政からホームスタートに繋がるパターンもある。白山市では保健師が乳児家庭全戸訪問事業で気になる家庭を発見した場合や行政では対応できない相談者がいた場合にはホームスタートを紹介し、支援に繋げている。加えて、ホームスタートは家庭という個人情報が多く存在する空間で活動を行う。そのため利用者の様子や家の様子を見て違和感を持てば虐待や家庭内暴力の早期発見に繋がる。早期発見ができれば行政の専門機関と連携し、迅速に対応ができるためより多くの家庭を救うことができるかもしれない。この点に関しては、行政との関係性が強固であるホームスタート・はくさんの力が存分に発揮されているといえる。

これから先、周知が進むことによってホームスタートが気楽に誰でも使える地域資源として浸透していけば、全ての人が妊娠期の早い段階からオーガナイザーと保健師の両者に相談しながらどのような支援が必要でどの支援を受けることができるのか、自分の子育ての方法を考えていくことができる。行政と連携していきながらホームスタートを上手く活用することで、家庭だけで抱え込む孤立した子育てから地域で行う子育てへ切り替えることが可能になると考える。

#### 参考文献

- ・加藤直子、請川滋大，2019，「訪問型子育て支援『ホームスタート』の可能性—潜在的利用者へのアプローチと隙間を埋める支援—」，『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』(25): 113–122
- ・堀聡子，2013，「『子育てひろば』における母親たちの社交」，『年報社会学論集』2013(26): 171–182
- ・ホームスタート・ジャパン (NPO 法人)，2011，『家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」実践ガイド』明石書店
- ・山口富子，2011，「ひろば型の地域子育て支援活動の魅力と制度的課題」，富山大学人文学部人文学科平成 23 年度卒業論文，<https://www.hmt.u-toyama.ac.jp/socio/lab/sotsuron/11/yamaguchi/index.htm>
- ・山田幸恵，2022，「家庭訪問型子育て支援・ホームスタート」，『子育て研究 = Japanese journal of research and practice on child rearing : 保護者・支援者・研究者がともに考える / 子育て研究編集委員会 編 』(12): 64–71

#### 参考資料 URL

- ・おやこの広場あさがお (NPO 法人)，2024，「NPO 法人おやこの広場あさがお～私の子どもから 私達の子どもたちへ」(<http://oyako-asagao.com/> 2024 年 1 月 10 日取得)
- ・厚生労働省，2024，「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）の概要」(<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/01.html> 2024 年 1 月 10 日取得)
- ・こども家庭庁，2024，「子ども・子育て支援新制度」(<https://www.cfa.go.jp/policies/kokoseido/> 2024 年 1 月 10 日取得)
- ・白山市，2023，「出産・子育て応援事業」(<https://www.city.hakusan.lg.jp/kenkofukushi/boshikenko/1009419.html> 2024 年 1 月 10 日取得)
- ・ホームスタート・ジャパン、2024，「Home-Start Japan 家庭訪問型子育て支援ホームスタート」(<https://www.homestartjapan.org/> 2024 年 1 月 10 日取得)
- ・文部科学省，2016，「訪問型家庭教育支援の関係者のための手引き」([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/03/28/1368962\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/03/28/1368962_02.pdf) 2024 年 1 月 10 日取得)

## 巻末資料

### ホームビジター養成講座参加者への質問一覧

Q1-1.あなたの年齢を教えてください。

Q1-2.普段お仕事はされていますか。

Q1-3.差し支えない範囲で仕事内容を教えてください。

Q1-4.週何日、一日何時間程勤務されていますか。

Q1-5.これまで子どもに関わる仕事に就いたことはありますか。

(例：保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、保健師等)

Q1-6.差し支えない範囲で具体的な職種と勤務年数を教えてください。

Q1-7.子どもに関する資格はお持ちですか。

(例：保育士資格、幼稚園教諭資格、教員免許等)

Q1-8.上の質問で「はい」を選んだ方に質問です。

具体的な資格名の記入をお願いいたします。

Q1-9.お子さんの人数とそれぞれの年齢を教えてください。

Q1-10.これまでに長期に渡ったボランティア活動に参加したことはありますか。(町内のゴミ拾い等単発のものは含まない)

差し支えなければ具体的に何をされていたか教えてください。

Q2-1.ホームスタートを知ったきっかけは何でしたか。

Q2-2.ホームビジター養成講座に参加しようと思ったきっかけは何でしたか。

Q2-3.ホームビジター養成講座を受ける前に期待していたこと、不安に感じていたことはありますか。

具体的に教えてください。

Q2-4.ホームビジター養成講座で特に印象に残っている回はどちらですか。

Q2-5.上の選択肢(講座)を選んだ理由を教えてください。

Q2-6.講座を受ける前後でホームスタート・ホームビジターに対する印象は変わりましたか。

Q2-7.上の質問で「はい」を選んだ方に質問です。

具体的にどのように変わったと感じていますか。

Q2-8.講座を受けることで自分の考え方や日常生活に何か変化はありましたか。

Q2-9.上の質問で「変化があった」を選んだ方に質問です。

具体的にどのような点が変わったと感じますか。

Q2-10.講座を通してホームビジターの活動に対して前向きな気持ちは強くなりましたか。

Q2-11.上の回答を選んだ理由を具体的に教えてください。

Q2-12.講座を通して、オーガナイザーや他の参加者の方との関係性は強固になりましたか。

Q2-13.上の質問に「はい」と回答した方へ質問です。講座内のどのような活動から関係性を築くことができたと感じますか。

Q2-14.講座に対する満足度を教えてください。(10段階評価)

Q2-15.上の選択肢(点数)を選んだ理由を教えてください。

Q2-16.講座を受けて理解が深まったことで、ホームスタートの周知をしていきたいと思えますか。

もし日程とお時間の都合がつけば、インタビューに応じていただくことは可能でしょうか。可能な方は、下にお名前と連絡先をお書きください。